

最近、研究現場では税金を使うことに対する説明責任を求める声が高まっています。この声に応じて市民向けイベントなどのアウトリーチ活動が重視されるようになってきました。そもそもアウトリーチ活動は説明責任から出発するべきか、ということ問い直せば連載5回分くらいになりそうですが、今回はこれについてはひとまずふれず、「広報媒体」として市民向けイベントを考えていきます。

### 少人数ならばベター？

ここ5年くらいで広まったイベントのスタイルに「サイエンスカフェ」があります。街中のカフェなどで、飲み物を片手にカジュアルなスタイルで、質疑応答や意見交換の時間をたっぷりとして、双方向のコミュニケーションを重視します。当然、こうしたスタイルだと、少人数での開催が基本になります。公的機関やファンディングエージェンシーなどが求める市民への説明も「双方向を重視せよ」との文言がみられるようで、サイエンスカフェの実施を検討している機関も、多くあるのではないかと思います。はたしてこれは正しい方向の取り組みといえるのでしょうか？

サイエンスカフェそのものについては、筆者も日本での黎明期に拡大の黒子役を担った自負もあり否定するものではありませんが、今回のテーマ、「広報媒体」としての市民向けイベントとしては、そのままでは不適です。何しろ少人数ですから、広報効果も限られるのです。

### 少人数イベントの広報的な使いみち

#### (1) 写真撮影とその後の活用

サイエンスカフェ以外にも少人数を対象としたイベントはあります。ガイドをつけての見学会しかり、参加者が自ら作業を行う実験教室しかり。もちろん、広報効果など考えずに、純粋に社会貢献のため、ということで割り切れれば構いませんが、せつかくならば、広報としても活用したいもの。その場合の留意点をいくつか書いてみます。

一つ目は、単純なことです。写真を撮ることです。イベントの準備に忙殺されると、記録用の写真を撮ることまでは頭が回っても、その写真を、その後の広報に利用させてもらう許諾を参加者から得ることを忘れてしまいがちです。活動の報告書に、年報に、あるいはホームページのイメージ写真に、と使い道も考えながら、どういう写真が撮れそうかイベントの企画段階から考えて臨みましょう。少人数のカフェスタイルのイベントならば、一瞥して会議室などとは違う雰囲気のを会場を選べば面白い写真が撮れるでしょう。写真の中に入ってきそうな、無関係のポスターなどについて一時的に剥がしてもらう交渉を会場

と進めるとよいでしょう。実験教室ならば、たとえば小学生の参加者といっしょになって熱心に作業をしている若手研究者の姿などは、後でたいへん使い道の広がる写真になります。しかしこれらのシーンは撮ろうと留意して臨まないとなかなか撮れないものです。シンポジウムなど大人数を対象としたイベントの写真は、どれも同じの味気ないものになりがちですので、少人数のイベントだからこそその記録を残し、活かしていくことは効果的です。

## (2) テキストの記録

二つ目は、やはり記録ですが、テキストの記録を残すことです。少人数でぎっくばらんな雰囲気を作り出せれば、質問や意見が参加者から多くでやすくなります。そして、当然、その場でそれらの質問には答えられるわけですが、一人の質問を、その場にいる 20 人程度だけで共有するのはもったいないだろう、という訳です。質問の多くは、万人に共通するようなものですので、これらを記録にとどめ、後で機関のウェブサイトなどにまとめると、魅力的なコンテンツになりえます。ウェブサイトや冊子用に、わざわざ改めて広報用インタビューを作ろうとするのは面倒ですが、イベントを活用してつくりあげる、ということも考えられるわけです。また、この記録作りに外部の手を借りることも考えられます。広報誌の制作が日程に上っていれば、外部のライターに参加者として入ってもらって記事にすること、あるいは、メディアに取材を依頼してうまくコンテンツにまとめる方向にすること、など、俯瞰的な計画があれば活かしていくことができるでしょう。たとえば、毎月開催されている東北大学サイエンスカフェでは、毎回、地元の新聞社によってイベントの紹介記事が掲載され、地域のケーブルテレビによる放映もおこなわれていて、来場者数の何倍もの波及がはかられています。

## (3) ソーシャルメディアなどとの連動

マスメディアとの連携は、とくに大都市では敷居が高いでしょうが、近年のインターネット上でのソーシャルメディアの発達には、必ずしも大がかりな仕掛けを要しないメディアタイアップを可能にしています。

演者と参加者の了解があれば、イベントのようすを動画で生中継することも、画質などを問わなければきわめて困難ということもなくなってきました。また、Twitter などミニブログサービスによって、文字情報によってイベントを“同時中継”することもできます。ソーシャルメディアなどの利用は、次回、取り上げますので、多くは触れませんが、イベントの参加人数を超えた大きな拡がりを作り出せる可能性を秘めたものです。

今回取り上げたことは、いずれも、イベントをイベントだけで終わらせない工夫です。努力して何かをおこなうときには、その成果を何重にも味わいたいもの。計画段階から吟味していくことで、より大きな果実が得られます。

次回予告 新しいネットメディアの活用